

第2編 上平B遺跡（2次調査）

遺跡略号 OK—UD・B
所在地 双葉郡大熊町大字大川原字南平
調査期間 平成17年10月26日～11月14日
調査員 阿部 知己・高林 真人

第1章 調査経過

上平B遺跡は『福島県遺跡地図』に登録・記載された周知の遺跡である。平成8年度には常磐自動車道建設予定地を対象とした表面調査により再確認され、その広がりは36,600m²と提示された（第1編図1参照。福島県教育委員会1997）。平成15年9月には、常磐自動車道建設地内の1,000m²を対象に試掘調査が実施され、町道を含む1,100m²が保存を要する面積とされた（福島県教育委員会2004）。平成17年度には、工事計画変更から工区が広がり、1次調査の結果、繩文土器を包含している堆積土が続くことが確認されたため、1次調査区の西側50m²が保存面積として追加された。

これまでの試掘調査及び工区拡張等において提示された、常磐自動車道建設地内における保存を要する上平B遺跡の面積は、1,150m²である。

発掘調査については、遺跡北側の780m²を対象に、平成16年に1次調査を実施した。これに続く2次調査は、前年度調査区の西側50m²を対象として平成17年に実施した（図1参照）。以下、調査の概要を記す。

10月26日には、50m²を対象に、重機による表土剥ぎに着手し平成17年度の発掘調査を開始する。10月27日には、南に隣接する上平A遺跡から調査員1名と作業員5名が移動し、本格的に遺物を包含する堆積土の掘削、遺構の確認を実施し始める。平成16年度の1次調査時において、赤褐色土（LⅡ）、黒褐色（LⅢ）中には、多量の遺物が含まれている状況を確認している。このため2層の遺物包含層の掘削にあたっては、1次調査と同様、グリッドごと、堆積層ごとに包含層の掘り込みを実施した。また、各堆積層を除去した段階で、遺構確認作業を実施している。

11月上旬頃には、基盤層である黄褐色土や疊層の上面で、3基の土坑や小穴が検出され始め、遺物包含層の掘り込みとともに、これら遺構の精査を併せて行った。11月14日には地形測量を実施し、平成17年度分の発掘調査を終了した。

平成17年度までに実施した上平B遺跡の最終的な発掘調査面積は、1次調査の780m²を加えて、合計830m²である。

福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団と東日本高速道路株式会社による現地の



図1 グリッド配置図

引き渡しは、上平A遺跡・上平B遺跡・道平遺跡を合わせて、12月2日に実施し、50m²の調査区についても埋め戻しを実施した。平成17年度の発掘調査で検出した遺構は、土坑3基、遺物包含層約50m²、小穴で、発掘調査に要した日数は延べ12日である。

また、町道北側据の20m²については、発掘調査工程状危険を伴うため、工事時の立会が予定されている。その他の町道部分（300m²）については工事が及ばないとして、調査をせずに現状のまま残される。

（阿 部）

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図2、写真2）

上平B遺跡2次調査において検出された遺構は、土坑3基と小穴である。平成16年度の1次調査に検出された遺構を合わせた遺構数は、掘立柱建物跡5棟、土坑25基、集石遺構1基、小穴である。図2には、平成16・17年度の調査成果を合わせて示した。

平成16年度の1次調査で確認された、縄文時代後期前葉の掘立柱建物跡5棟については、周辺に多数の小穴が確認できることから、調査区の外にも建物跡のある可能性が高いことが指摘されている。また、建物跡周囲の貯蔵穴などのあり方や、出土遺物に特殊なものは認められないことから、ごく一般的な集落のあり方と判断されている。

建物跡から南に40m離れた上平A遺跡の3次調査区北端からは、同時期の堅穴住居跡2軒が確認された。この場所は、上平B遺跡のある現地表から4mほど高い場所にあり、建物跡の位置を見下ろす形となり、そこから45mほど南の段丘肩部には該期の貯蔵穴群が立地する状況が分かった（第1編図5参照）。このことから、大川原川南岸の段丘上には、上平B遺跡と同じ縄文時代後期前葉の遺構が、最も高所の段丘肩部に貯蔵穴、その下斜面裾に堅穴住居跡、さらに下段に建物跡と貯蔵穴という具合に、意図的に構造物の設置場所を分けていた可能性が高いと考えられる。

基本土層（図3、写真3）

基本土層については、平成16年度の1次調査時に確認した内容と一致している。

上平B遺跡の1・2次調査を実施した、町道の北側については、圃場整備による地形の変化を受けてはいるものの、そのほとんどは盛土によるものであることが確認された。調査に際しては、調査区内に堆積する土をL I～L IVに4区分した。L Iは圃場整備時の盛土を含む表土、L IIは鈍い赤褐色土で、その土質から調査当初は圃場整備に関わる盛土と考えた。しかし、L IIは均一な土で構成され、ブロック土が混じり込むような状態は観察されていない。包含されている遺物そのものにも摩滅も見られない。基本的にL IIについては、盛土ではなく、自然堆積層が後世の水田耕作により2次的な変化を受け、赤褐色に変化したものと考えている。

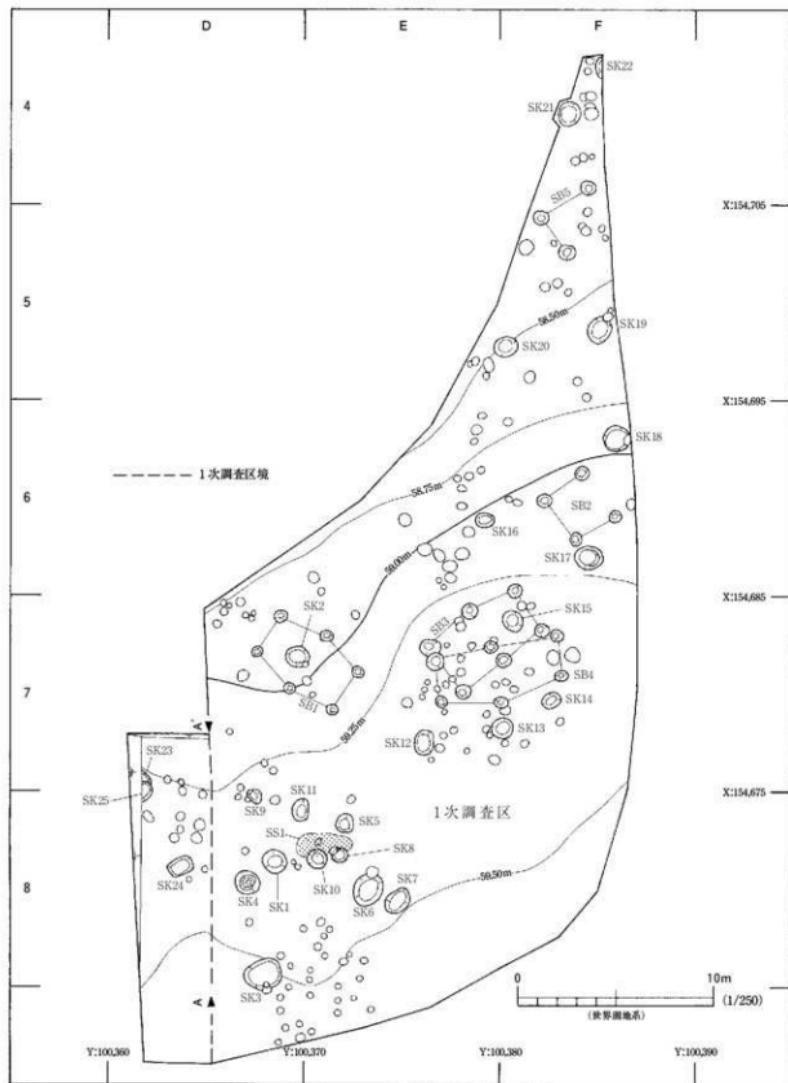


図2 遺構配置図

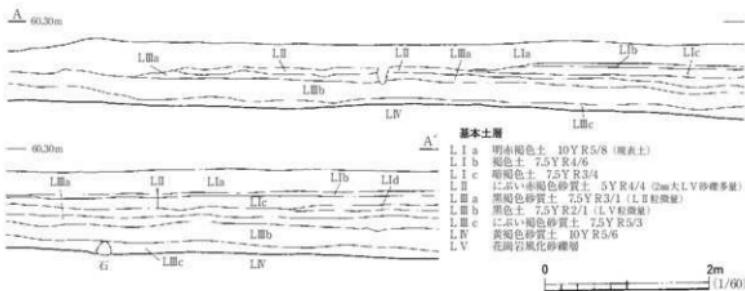


図3 基本土層

図3に示した基本土層A-A'は調査区西壁の状態である。L Iは表土で、圓場整備に伴う盛土を含む。比較的多くの遺物を包含している。L IIはにぶい赤褐色土で層厚は10~20cmほど、調査区内をほぼ一様に覆っている。調査区南端については、圓場整備の時若干削平されているらしく、欠落している。遺物の出土量は多く、L I出土分を除くと、包含層出土量の約30%を占めている。

L III層はa~cに3分類している。L III a・bは黒褐色土、L III cはにぶい褐色土で、L IVに統く漸移層である。L III aの層厚は10~30cmほど、L III b層の層厚は20~40cmほどで、斜面下位の北側に向かって若干厚さを増して堆積している。L III c層はにぶい褐色土で、層厚は約10cm、遺跡内をほぼ均一に覆っている。基本的にL III cは無遺物と考えている。

各堆積層と遺構との関係を概観すると、純文時代後期の土坑の多くは、L III c上面であらかたその存在を知ることができる。

(阿 部)

第2節 土 坑

上平B遺跡2次調査では、3基の土坑を確認した。1次調査時の土坑数を加えると、合計25基を数える。土坑の番号は、1次調査を踏襲して、23番から付けた。

23号土坑 SK23 (図4, 写真3)

本遺構はD 7・8グリッドにまたがって位置し、西半分は調査区外に続いているため全容は明らかではない。SK25と重複しており、本遺構の方が新しい。検出面は南・東側においてL III c上面である。一方、土層断面(図4左上A-A')を見ると、北側ではL III c上面よりも30cmほど高い位置のL III a層下部から掘り込まれている。

平面形は不整橢円形である。規模は、上端で長軸200cm、中端で長軸97cm、長軸方位はN40°E、検出面からの深さは37cmを測る。周壁は、底面から約20cmまではほぼ垂直で立ち上がった後、それより上位では緩やかに立ち上がっている。このため断面形はロート状を呈している。底面は平坦で

ある。

堆積土は6層に分けられる。堆積土にはレンズ状の堆積状況が観察できることから、自然堆積土と考えている。

本遺構からは縄文土器片が3点出土し、図4下に示した。同図1～3はすべて深鉢形土器の胴部片で、1は斜行縦文を施し、2は1条の沈線線上に円形の小突起を貼り付けている。3は1条の隆帯を巡らし、その下に斜行縦文を施している。

本遺構は不整梢円形の土坑で、その性格を明らかにすることはできなかった。土坑の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えている。

(阿 部)

24号土坑 SK24 (図4, 写真3)

本遺構は、D 8 グリッドに位置し、北西3.5mにSK23・25がある。検出面はL IV上面である。

平面形は上端では不整梢円形、中端において隅丸長方形を呈している。規模は上端で長軸約196cm、短軸約150cm、中端で長軸約126cm、短軸約84cm、長軸方位は中端でN55° E、検出面からの深さは72cmを測る。底面はほぼ平坦である。周壁は、西・北壁ではほぼ垂直に立ち上がり、東・南壁は急な角度で底面から50cm前後立ち上がった後、それより上位では緩やかに立ち上がっているため、断面形状はロート状を呈している。

遺構内堆積土は8層に分けられる。壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積土と判断している。②・③は、土中にL IV粒を多量に含んでいることから周壁の崩落土と考えている。

本遺構からは縄文土器片が34点出土し、そのうち2点を図4下に示した。図4-4は盲孔をえた円形の突起が付されている。同図4は縄文地に、縦位に並ぶ列点状の刺突文を施している。

本土坑については出土遺物から縄文時代後期前葉と考えている。本土坑は、規模と形態から落し穴状土坑と考えている。

(高 林)

25号土坑 SK25 (図4, 写真3)

本土坑はD 7 グリッドに位置し、西半分は調査区外に続いているため全容は明らかにできなかつた。SK23と重複しており、本土坑はSK23により壊されている。検出面は東側においてL III c面である。土層断面（図4左上A-A'）をみると、北側ではL III c上面よりも30cmほど高い位置のL III a層下部から掘り込まれていることが分かる。

平面形は隅丸方形を呈していたと考えている。規模は、L III c面で確認できた東西長で長軸86cm、検出面からの深さは11cmを測る。周壁は、土層断面（図4左上A-A'）をみると、底面から急な角度で立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

遺構内堆積土は3層に分けられる。壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積土と考えている。

本遺構から遺物は出土しなかった。

第2編 上平B道路(2次調査)

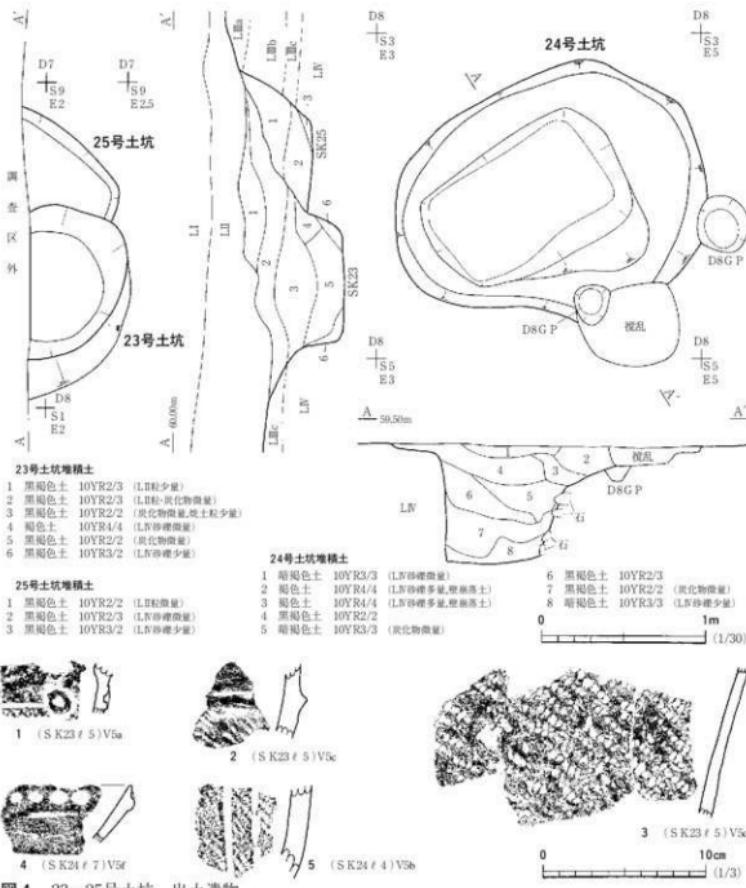


図4 23~25号土坑、出土遺物

本構造は平面隅丸方形の土坑であった可能性が高いことが確認されただけで、機能については不明である。時期については、SK23との重複関係から、縄文時代後期前葉と考えている。(高林)

第3節 遺物包含層

上平B遺跡の2次調査では、平成16年度の1次調査時同様、調査区のはば全城に遺物包含層が形成され、調査の段階でL I～IVの4層に区分し、調査を進めた。これらの土層の詳細については、第2章第1節で報告した。

また、遺構外出土遺物については、10mグリッドを4分割した一辺5mの方眼ごとに取り上げた。この4分割した方眼は、北西から時計回りに「1~4」と番号を付し、例えば、D 8 グリッドの4番目のマスから出土した場合、「D 8-4」と表示し、併せて遺物の出土層位も付した。

以下では、包含層から出土した遺物について報告するが、表土や搅乱穴等の中から出土した遺物についても本節で扱う。

遺物の出土状態 (図5)

上平B遺跡の2次調査で出土した土器は、V群土器が主体をなし、今回出土した点数は1,381点で、1次調査も合わせると合計10,746点が830m²の調査区から出土したことになる。今回の調査

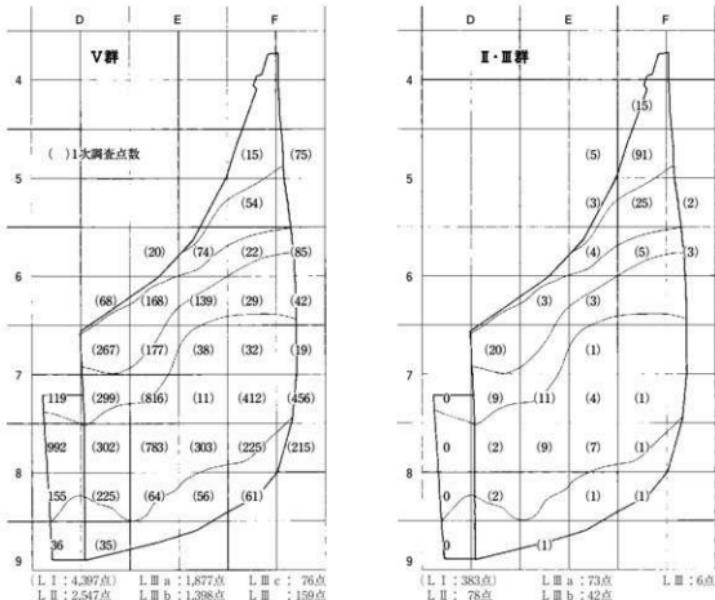


図5 グリッド別土器出土点数

では1次調査で確認できていたⅡ・Ⅲ群土器は1点も出土していない。

2次調査で確認したV群土器の堆積層ごとの出土量は、L Iが79点、L IIが1,043点、L III aが266点、L III bが33点を含んでいた。図5にはL Iを除いた平面的な土器の出土量を示した。最も出土量が多いのがD 8-1グリッドの992点で、他に比べて圧倒的に出土量が多かった。V群土器は、II群土器に比べ調査区西縁付近に分布の中心を持つようである。これに対し、1次調査時に確認した縄文時代前期前葉の土器に比定されるⅡ・Ⅲ群土器の分布は、1次調査区の北東端付近に分布の中心があると考えられている。

2次調査で出土した土器の大半は、手の平大以下の破片で、特にまとまった状態で出土した個体は無かった。なお、包含層の掘り込みに際しては主として唐鋤を使用したため、石鋤等小型の遺物については、サンプリングエラーが生じた可能性がある。

遺 物（図6～8、写真4）

V群土器 V群土器は1点だけ図示した。図6-1は2類で、施文された文様から大木10式と考えられる。

V群土器 図6-2～13は突起の付く口縁部で1類とした。図6-2・4～7・9は隆帯による「C」字状または棒状の突起である。図6-3・10・11は波状口縁の波頂部に付く楕円形状の小突起である。図6-13は突起状の盲孔に沈線が施されていた鉢の口縁部片である。図6-8は無文地で平板な造りの突起である。1次調査同様、平口縁の深鉢形土器が主体を占めると考えられる。図6-12はひねりを加えた突起を持つもので、加曾利E式系土器の可能性もある。

2類は図6-14～20が比定され、縄文地に沈線で蕨手状または波状文様を描いている。

3類はa・b種の2つに区分した。a種は図6-21・22で、胴部に縦位の帶状無文帯が配されている。b種は図7-1～9・11・12で、幅の狭い帯状の無文帯・縄文帯で文様を描いている。文様の基点には盲孔を配し、図7-1・5・6のような「C」字状や楕円形状の文様が多く描かれていている。図7-4は無文地に沈線で文様を描いている。

5類はa～f種に区分したが、1・2種との区分においては不明なものが多く見られる。

図7-10・13～18はa種に比定され、「C」字状または棒状の隆帯の突起に類似するが、退化に伴う沈線化が見られる。b種は口縁部下端に沿って横位の沈線または隆帯を巡らしたものである。図7-19・21は沈線を、図7-20・22・23は隆帯を巡らしている。c種は器面に条線文を施したもので、図7-26・27が比定される。d種は口縁部下端に沿って押圧を加えた隆帯が巡るもので、図7-24・25が比定できる。

図8-1～5は6類とした。図8-2は注口土器片で、注口部の上に突起が付かれていることから、正面観が「8」の字の突起状に見えるよう整形してある。図8-1・4・5は両耳壺の把手部分と考えている。図8-3は壺形土器の口縁部片と考えられ、「8」の字状の把手が付けられている。

V群土器は、口縁部文様帶の「ノ」の字状や「C」字状の隆帯に沈線や盲孔が加えられることや、口



図6 遺物包含層出土遺物（1）

第2編 上平B道路(2次測量)

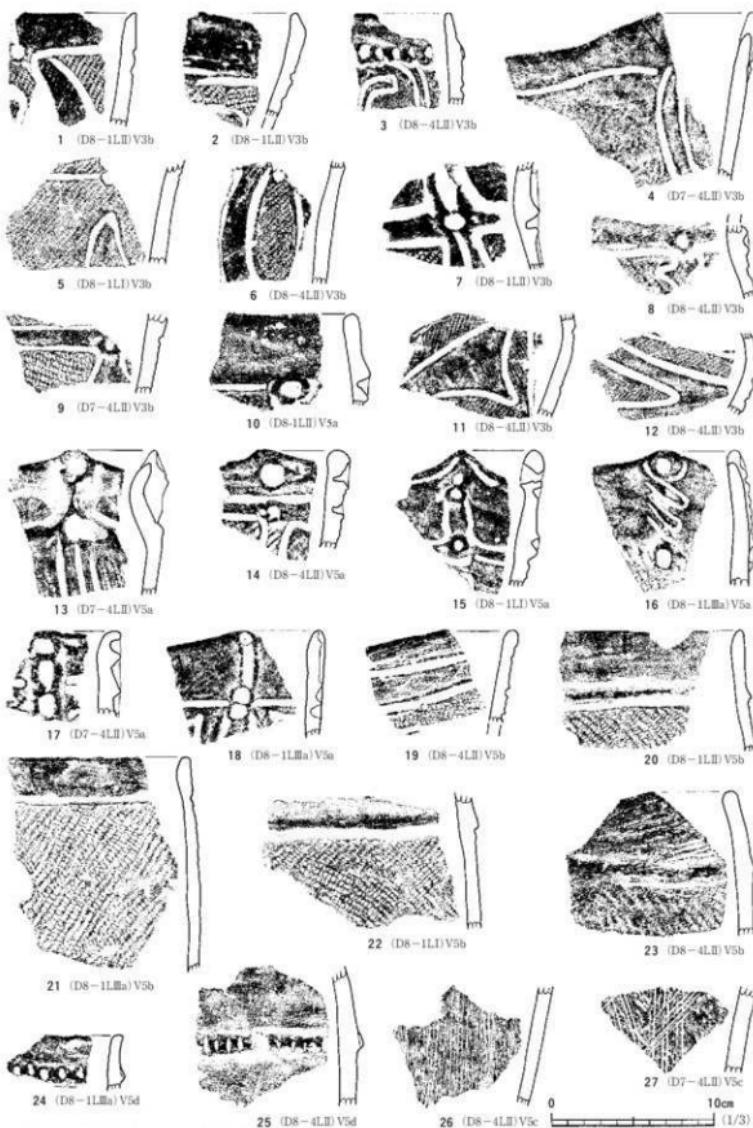


図7 遺物包含層出土物(2)

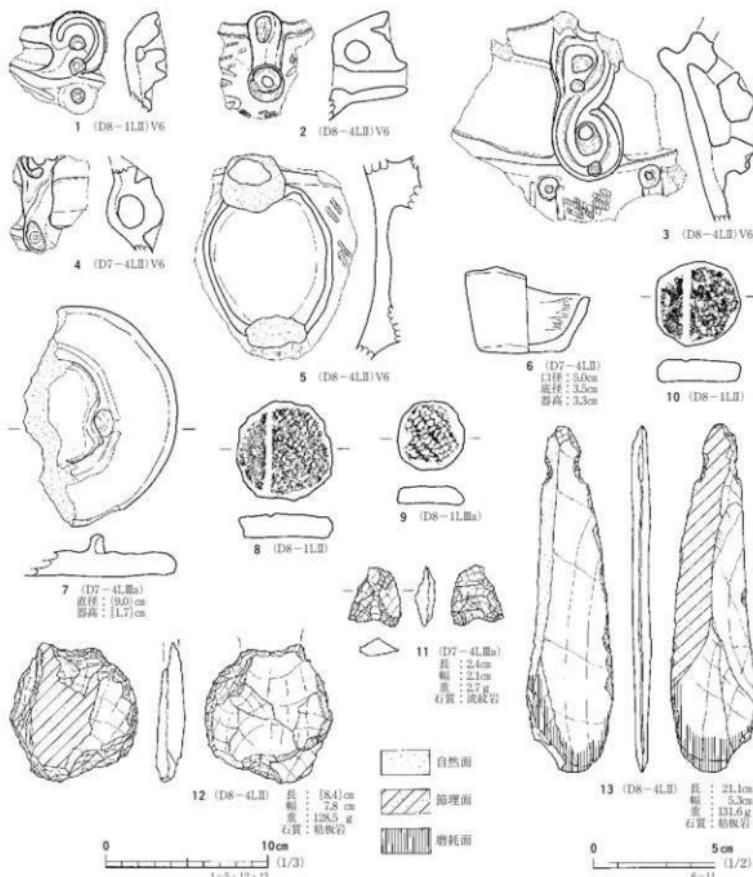


図8 遺物包含層出土遺物(3)

縁部下端の隆帯に代わり沈線を施したり、隆帯に沿って沈線が施されることなどから、その多くは網取I・II式土器と考えている。

土 製 品 図8に示した5点が包含層中から出土したすべてである。同図7は蓋の破片で、上面に円形の隆線に盲孔が認められるもの、目立った文様は施されていない。同図6は鉢状のミニチュア土器である。同図8~10の3点は土器片を用いた円盤である。

石 器 図8に示した3点が包含層中から出土したすべてである。同図11は石鎌の未完成品で、素材の厚みが取りきれていない。同図12・13はいずれも粘板岩製の打製石斧で、13はクツベラ状を

第2編 上平B遺跡（2次調査）

呈し、12は分銅形であったと思われる。同図13の刃先部分をみると、図中に破線で示した範囲に、
使用による磨耗が認められる。

(阿 部)

参考文献

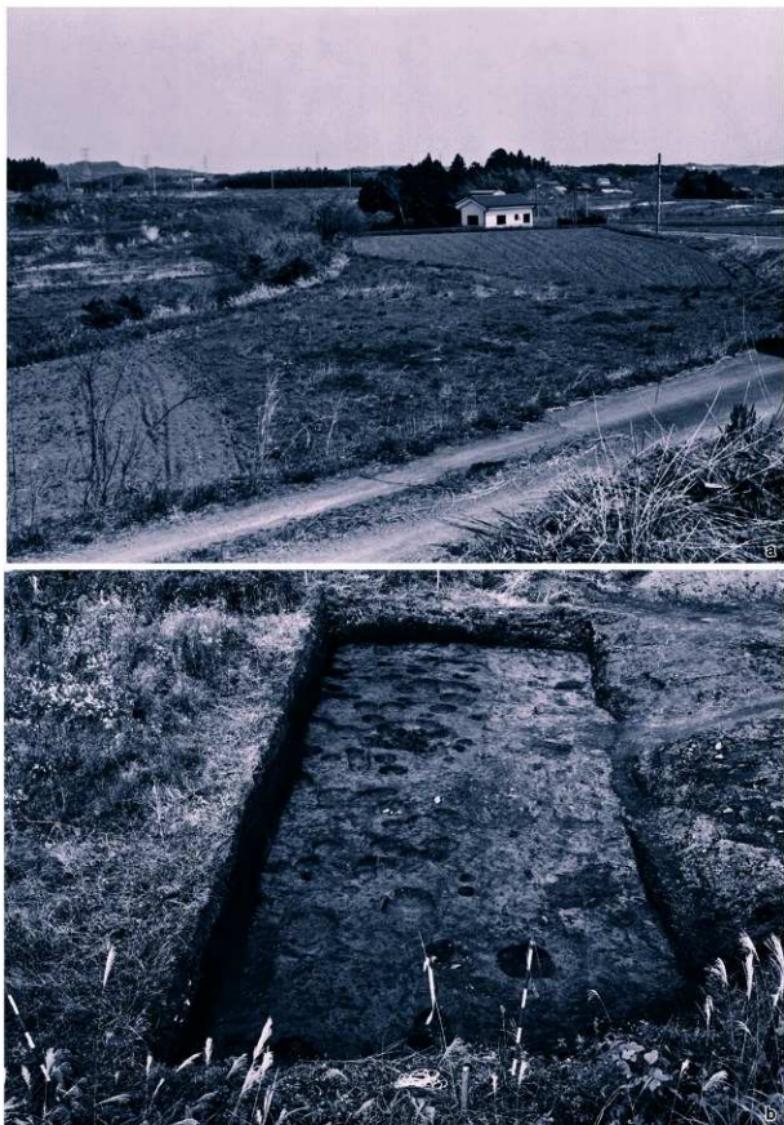
- 福島県教育委員会 1997 「福島県内遺跡分布調査報告3」
2005 「福島県内遺跡分布調査報告11」
松本 茂ほか 2005 「常磐自動車道遺跡調査報告41」 福島県教育委員会
「まとめ」については「第4編第3章」中で後述した。



1 遺跡遠景

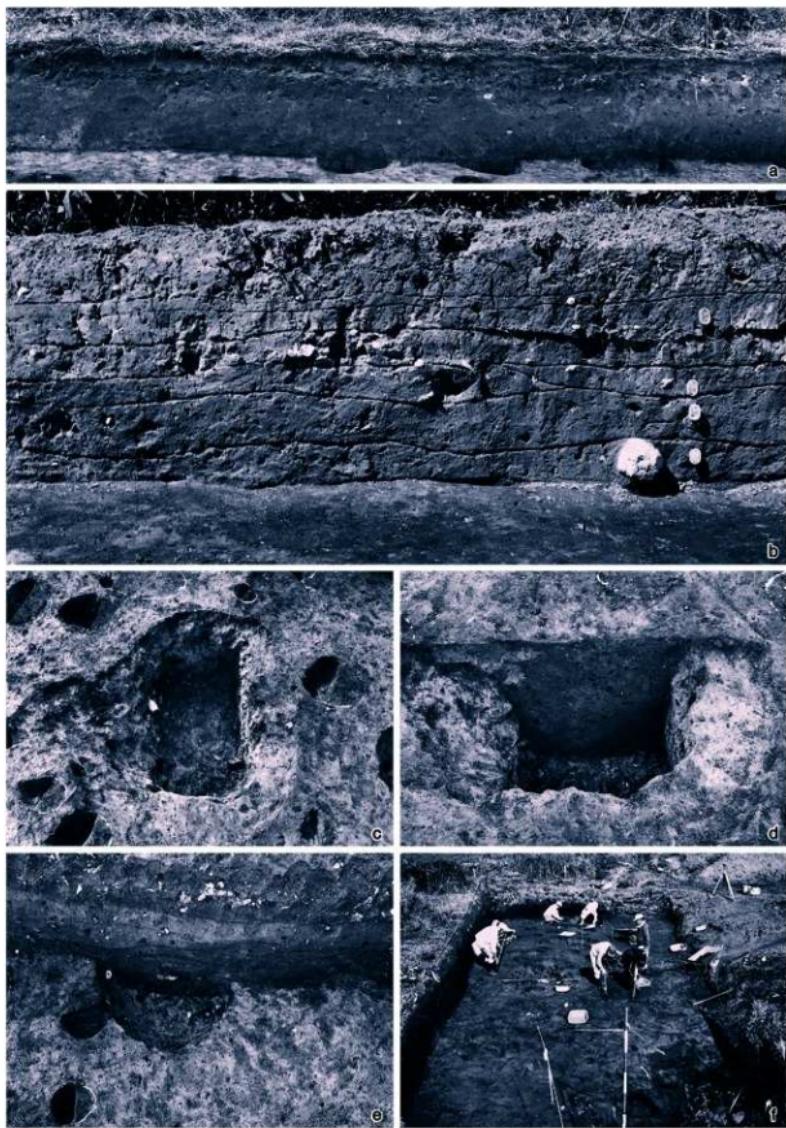
(南上空から。平成11年10月撮影)

第2編 上平B道路（2次調査）



2 調査区全景

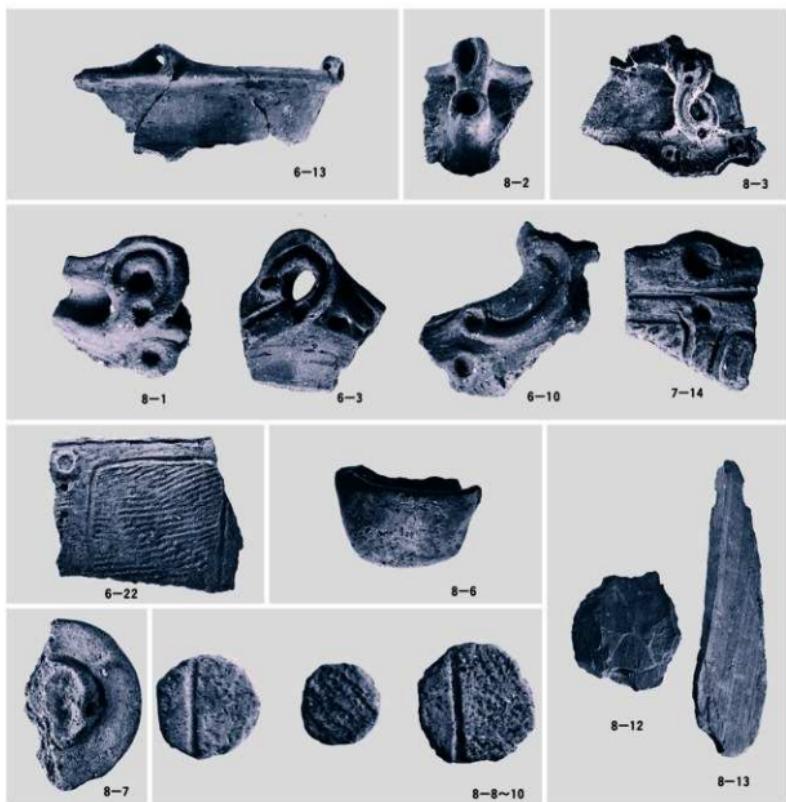
a 調査前調査区近景(南西から)
b 調査区近景(南から)



3 基本土層, 23~25号土坑

a 基本土層 1(東から)
 b 基本土層 2(東から)
 c 24号土坑全貌(東から)
 d 24号土坑土層(北東から)
 e 23・25号土坑全貌(東から)
 f 作業風景(南から)

第2編 上平B道路（2次調查）



4 出土遺物